

山の本を楽しむ

藤井 諭

この2月にアキレス腱を断裂し手術で入院した。当分は登山ができなくなってしまうことになりショックだった。個人山行を含めほとんど毎週のように山へ登っていた者にとっては相当につらい。こんな時期にしかできないことはないかと考えた。山の本を読む、山の写真を整理する、山の記録を整理する、etc. その中で普段あまりできなかった山の本を読み、バーチャルな登山を楽しむことを考えた。

読んだ本のあらすじ、内容のポイントと感想を、今月から何回かに渡りまとめて掲載してみたい。息抜きに読んでいただくと幸いです。

第1回 新田次郎著「槍ヶ岳開山」

【あらすじ】

江戸時代の文化10年（1813年）、富山の百姓一揆にまきこまれ、過って妻のおはまを刺殺してしまった岩松は、国を捨てて出家した。罪の償いに厳しい修行を自ら求めた彼を絶え間なく襲うのは、おはまへの未練と煩悩であった。妻殺しの呵責に苦しみつつ、未踏の岩峰・槍ヶ岳初登攀に成功した修行僧・播隆の生き様を描く長篇伝記小説である。

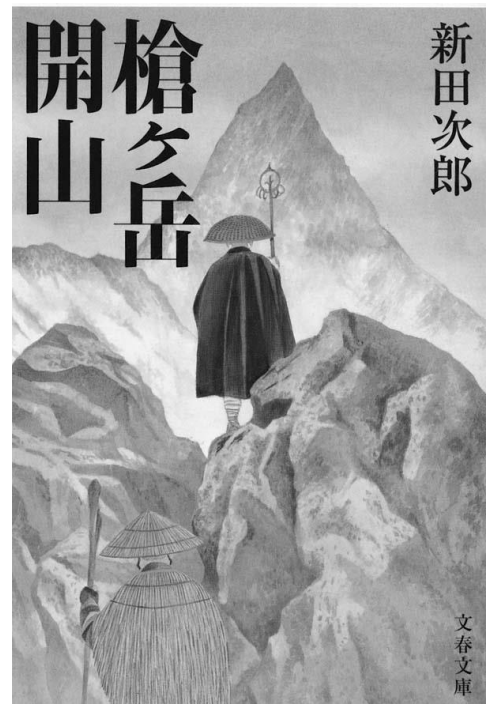
【内容のポイントと感想】

本の中の「笠ヶ岳再興」は、播隆上人が笠ヶ岳への道を切り開いた記録である。一揆の罪に問われた岩松（後の播隆上人）は、越中から黒川を上り詰めて檜峠を越え、高原川を下って飛騨に国落ちする。そして高山にある本覚寺の椿宗和尚に出会い出家する。厳しい修行を積み重ねてりっぱな僧となり、39歳の時に椿宗和尚から笠ヶ岳再興を奨められる。笠ヶ岳は円空上人が開山して既に40年経ち、道はなく信者たちの登頂は困難であった。

41歳となった播隆は笹島から笠谷を登りつめ、錫杖岳の尾根に取り付いて雷鳥岩に至り、笠ヶ岳の山頂を目指す長大なコースをとっている。現在だと槍見温泉からクリヤ谷を詰めて雷鳥岩から笠ヶ岳山頂に至る登山コースがあるが、それでも登りのコースタイム9時間半と熟達者コースである。笹島からだ、今は登山道のない長大なコースで、道もなく沢登り・ヤブコギ・岩登りと連続して困難を極めた。播隆たちは途中で野宿して山頂に至り、そして山頂にある岩穴に泊まっている。そしてここで、播隆は不思議な光景を目にする。次はその一節である。

“ばたっとなにか倒れるような音がした。それも風の音で、突風が吹き起こって岩を叩いた音だった。その音と同時に、播隆の目の前で異様なことが起こり始めた。実体は、速い速度で霧の中を迫ってくるように思われるほど急激に、その輪郭を明瞭にした。人の影であった。やや身体を斜めにした姿であった。人の姿が浮かぶと同時に急に周囲が明るくなった。七色の光輪が霧の中の人の像をその輝かしい光の中におさめた。”

これを見たお供の人夫たちは播隆の登頂を祝う“如来様”が現れたと思った。その噂が広まり、播隆は神に近い人と呼ばれるようになった。現代科学ではこれは“プロ



ッケン現象”として知られるが、当時は科学の知識がなく神の出現と見られたようである。以後、播隆上人は笠ヶ岳再興の英雄として崇められるようになった。

そして、次は前人未踏の槍ヶ岳の開山を期待されるようになった。当時の上高地は温泉小屋がひとつあるのみで、梓川上流には道も橋もない未踏の地だった。文政 11 年、播隆は案内人の中田又重郎、穂苅嘉平らを伴って安曇野から蝶ヶ岳を経て梓川へ降り立った。渡渉を繰り返して上流へ進むが、増水のために渡渉は大きな危険を伴った。槍ヶ岳山頂に安置する重い阿弥陀如来像を背負った嘉平は、二ノ俣谷（槍沢分岐）の渡渉中に流木に衝突され大怪我をした。それでも一行は怯まず、その日に何とか赤沢岩小屋にたどり着いた。翌日、嘉平に代わって又重郎が阿弥陀如来像を背負い、播隆と共に槍沢を詰めて槍ヶ岳を目指した。次はこの本の冒頭にある槍の穂先での、槍ヶ岳初登頂の瞬間の記述である。

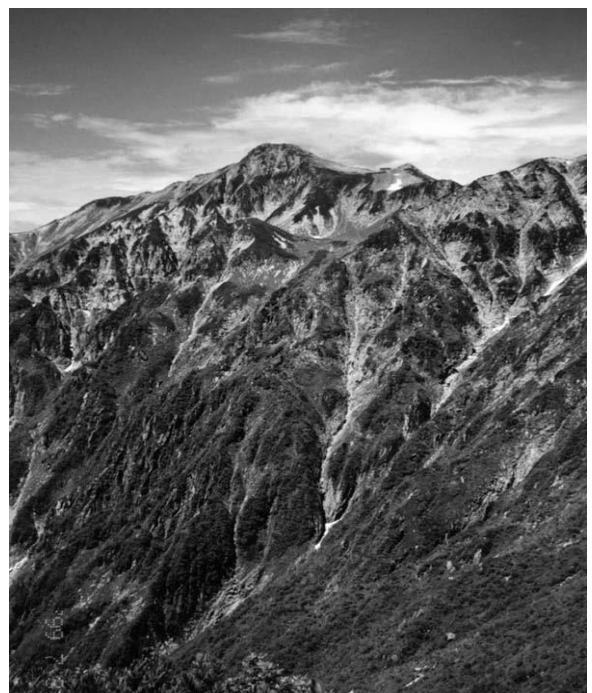
“「よいしょ、よいしょ」という又十郎の懸け声に混じって、播隆の南無阿弥陀仏をとなえる声が聞こえた。そこから頂上まで、又重郎は、投げ綱を三度使った。三度目は使うほどのところではなかったが、安全のため使った。両手をいっぱいひろげて抱きつくような大きな岩を乗り越えたところが頂上だった。信濃国安曇野郡小倉村中田又重郎がまず槍ヶ岳の頂上を踏み、つづいて、山城国一念寺の僧、播隆が頂上を踏んだ。文政 11 年（1828 年）7 月 28 日申の刻（午後 4 時）であった。ふたりは手を取り合ったまま、しばらく口が利けなかった。播隆の大きな眼に露が光っていた。又重郎は怒ったような顔で、しきりに鼻をすすりあげていた。”

槍ヶ岳山頂で、再び播隆の前に五色に彩られた虹の輪が現れた。これもブロッケン現象だが、播隆は笠ヶ岳山頂で出会った阿弥陀如来の再来と信じ合掌した。

天保 5 年 8 月 1 日播隆は再び山頂に立ち槍ヶ岳開山式を行った。槍ヶ岳開山を果たした播隆の名は広く世間に広まり、犬山城主は播隆の希望に沿って槍ヶ岳にかかる鉄の鎖を寄進した。これを山頂直下にかけて庶民が登れるようにしてこそ真の開山である、との信念であった。再び槍ヶ岳を目指し完全開山を果たした後、天保 11 年（1840 年）に弟子や信者に見守られて 58 歳で没した。

この本は山岳小説というよりは、仏教の信仰を登山に求めた物語である。妻のおはまを過って殺してしまった播隆は、仏門に入ってその罪をつぐなおうとする。そのひたすらな修行の中で、信仰の山の開山があった。当時の笠ヶ岳と槍ヶ岳は道がなく登頂が困難な山であり、信仰の対象の高山であった。

笠ヶ岳も槍ヶ岳も日本を代表する名山であり、私も大好きな山である。この二山に挑戦する主人公の情熱と執念は、近代の初登頂を目指した登山家、マッターホルンのウィンパーやアンナプルナのエルゾークと共通するものを感じた。誰も登ったことのない道を開拓して山頂に至る、これはどんな山でも最高にドキドキ、エキサイティングする時だ。そして苦難の末に山頂に達した充実感は何者にも代え難く、これが登山の原点であると思う。播隆上人は日本の登山史上の開拓者である、と感じた面白い本だった。（つづく）



笠新道から望む笠ヶ岳